

2025 年度 (令和 7 年度) 学校評価自己評価表

幸千 中学校区

校番

福山市立 幸千中 学校

最終更新日

2026年(令和8年)2月19日

I 福山市

ミッション
ビジョン

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを
実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容
○ボランティア活動や交流館との連携
など、地域との関わり(CSの取組)を
通して、子どもたちが成長している。
●保護者・地域住民への積極的な情報
発信を行い、CSの取組を知ってもら
うとともに、地域連携をさらに深めて欲
しい。

児童生徒の現状
○地域行事やボランティア活動に主体
的に参加する児童・生徒は年々増えて
おり、それが児童・生徒の自信や地域
への愛着につながっている。
●中学校区として不登校数はまだ多
い。
●体力テストにおいて、県の平均値以
上の項目がまだ少ない。

育成する力
資質・能力
めざす子ども像
(義務教育修了時の姿)
中学校区として
統一した取組等

思考・創造力 表現力 思いやり 能動的市民性
○主体的に学び よく考える生徒 ○自分なりに表現し伝え合う生徒
○思いやりのある生徒 ○人や社会に貢献しようとする生徒
○住み続けられる町づくりを考えることを目的にした学習を核に各教科等と関連づけ
たカリキュラムを実施することで、めざす子ども像に迫る取組を行う。
○生徒の実態を細やかに分析し、生徒のつまずきの要因に対応した指導と支援を行
う。

III 自 校

ミッション
福山に愛着と誇りを持ち、
変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

学校教育目標
有為の人
～夢の実現にむけ、真摯に努力する生徒の育成～

現 状
〈児童生徒〉
・生徒会活動、学校行事など、生徒自らが問題発見、問題解決することに挑戦している。
・不登校生徒数は年々微減しており、R6年度 50名(7.7%)。※全国平均(R5) 5.4%
・全国学力調査において県平均に近づいている教科(国語)もあるが、全体的に学力の定着
には課題がある。
・ヘルメットの着用率が低く、ルールを守ることができていない状況が見られる。
〈授業〉
・個人や学年で検定試験に積極的に挑戦しており、教員、生徒ともに学習の定着を図るこ
とにしっかり取り組むことができています。また、その取り組みが生徒の自信につながり、
次の目標を立て主体的に学びに向かう生徒もできています。
・生徒が問いをもつ授業を通して、生徒が主体的に課題に取り組む場面が増えている。し
かし、身につけさせたい力を明確にし、全体を見通した授業づくり(単元構想)はまだ十
分とは言えない。

育成する力
資質・能力
めざす
子ども像
レベル3
レベル2
レベル1

思考・創造力
自分自身の「思考・
想像力」について評
価し、示すことがで
きる。
情報を収集すると
ともに、分析・活用し
ながら、問題を発見
し、その問題解決を
目指すことができ
る。
与えられた情報を整
理できる。

表現力
自分自身の「表現
力」について評価
し、示すことがで
きる。
多様な人たちに、相
手の立場や背景を考
えながらわかりやす
く伝えることができ
る。
自分の意見や考えを
集団の前で話すこと
ができる。

思いやり
自分自身の「思いや
り」について評価
し、示すことがで
きる。
周囲の幸せを考
えることができ、集団
や他者に対して、思
いやりを持って行動す
ることができる。
集団や他者との中
で、他者を気づかえ
る。

能動的市民性
自分自身の「能動的
市民性」について評
価し、示すことがで
きる。
社会をよりよくしよ
うと、社会の主体と
しての意識を持ち、
社会がよりよくなる
ために行動できる。
所属する一員として
の自覚を持つ。

研究
テーマ
内容等
めざす授業の姿

『問いを創る授業』を基盤とした、生徒が考えたい授業の実現
～身に付けたい力を明確にした単元構想を通して～
①学力調査等から、生徒の実態を把握し、付けたい力を明確にする。
②生徒自らが問いをもち、主体的に問題解決を図ることのできる授業づくりをする。
○生徒が、自身の学習の定着度が分かり、指導者とともに次の目標や手立てが共有で
きる授業。
○主体的に問いをもち、問題解決のプロセスを通じて、学び方・考え方を身に付けら
れる授業。

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立	幸千中	学校
------	-----	----

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日）				最終評価（2月末）				
							□指標に係る 取組状況	プロセス 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期（中期）経営 目標の達成状況	プロ セス 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	・主体的に考え、自らの力で課題解決を図ることができる生徒の育成 ・生徒に確かな学力を身に付けさせるための授業づくりと指導力の向上	★	新規	・生徒に、主体的に学びに向かおうとする態度を育む。 ・生徒に、家庭学習や自主的な学習に積極的に取り組もうとする態度を育む。 ・教員の、学びをファシリテートする力・単元を構想する力を高める。	・生徒が課題意識をもって学習に取り組めるように、問いを創る授業（問題解決的な学習）を基盤とした授業づくりに取り組む。 ・生徒の実態を的確に分析し、身に付けさせたい力を明確にした単元構想を立て、それに基づいた指導に取り組む。 ・家庭学習の定着を図るための工夫に取り組む。 ・指導と評価の一体化を意識した実践に取り組む。	・生徒の変化に応じた柔軟な授業の実践（教員アンケート関連項目において肯定的評価）90%以上 ・生徒の学びの状況（生徒アンケート関連項目において肯定的評価）85%以上 ・全国学力調査/標準学力調査等における正答率40%未満の割合 30%未満	・教員の柔軟な授業実践についての肯定的評価は91.7%であった。 ・生徒の学びの状況の肯定的評価は86%であった。 ・全国学力調査・標準学力調査における正答率40%未満の割合が30%未満の教科は、3年1/2教科、2年1/5教科、1年4/5教科であった。	3	3	・引き続き、問題解決的な授業を基盤とし、生徒が思考する授業、主体的に学習に取り組める授業づくりを行う。 ・各種学力調査の分析を基に、幸千中学校区授業づくりポートフォリオを全教員で作成し、授業改善を行う。 ・基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるための授業における活動や家庭学習の取組を継続して実施する。	・教員の柔軟な授業実践についての肯定的評価は94.1%であった。 ・生徒の学びの状況の肯定的評価は86.1%であった。 ・標準学力調査（12月実施）における正答率40%未満の割合が30%未満の教科は、2年1/5教科、1年2/5教科であったが、1学期実施の標準学力調査と比べ、2年4教科、1年1教科において、正答率40%未満の割合が減少した。また、数学においては、1・2年ともに正答率40%未満の割合が市平均を下回った。	3	3	3	・各種学力調査等の分析や生徒の学習状況等を踏まえながら、生徒の実態に応じた授業づくりを行えるよう、継続的に研修を行う。 ・引き続き、問題解決的な授業を基盤としながら、授業や家庭学習等において、特に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるための取組を継続する。
3	・自尊感情、自己肯定感、自己効力感の高い生徒の育成 ・一人一人の多様な幸せ、また社会全体の幸せでもあるWell-beingの理念の実現		継続	・生徒が自分で決めて実行し成功する体験を通して、生徒に自信を育む。 ・生徒が自らボランティア活動を企画・実施することを通して、生徒に社会貢献の素晴らしさや地域への愛着を育む。	・ライフスキルプログラムに計画的に取り組む。また取組内容を全体に周知する。 ・各種検定に取り組む。（検定の意義および実施計画・結果等を周知する。） ・ボランティア活動の企画（月に1回）と実施及び活動成果の分析と結果の周知を行う。	・生徒アンケート「自分で目標を決め、学びや学校行事に取り組んでいる」85%以上 ・生徒アンケート「ボランティア活動に積極的に参加している」60%以上 ・生徒アンケート「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」85%以上	・「自分で目標を決め、学びや学校行事に取り組んでいる」生徒の肯定的評価は90%であった。 ・「ボランティア活動に積極的に参加している」生徒の肯定的評価は54%であった。 ・「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」生徒の肯定的評価は86%であった。	3	3	・生徒に学校生活にある課題に気付かせ、課題解決に向けた主体的な取組を実施させる。そのために各種委員会活動、係活動を充実させる。 ・ボランティア活動において、積極的に校外に向き、人との関わりややりがいや一層感じられる内容に取り組ませる。	・「自分で目標を決め、学びや学校行事に取り組んでいる」生徒の肯定的評価は91%であった。 ・「ボランティア活動に積極的に参加している」生徒の肯定的評価は46%であった。 ・「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」生徒の肯定的評価は83%であった。	3	2	3	・学級における係活動および各種委員会の活動について生徒が自ら課題を見出す中で主体的に活動をさせる。 ・ボランティア活動を計画的に組み込むなど、他者や地域社会へ貢献している実感を得ることができるよう意図的な働きかけを推進する。
3	・生涯にわたって運動に親しむとともに、健康の保持増進と体力の向上を目指す生徒の育成		継続	・生徒に、主体的に体力の向上に取り組む態度を育む。 ・生徒に、運動の楽しさを実感させ、健康を大切にすることを育む。	・体育の授業で、筋力・基礎体力の向上に係る種目を継続して実施する。 ・授業の中で協働的な学習の場面を設定し、他者との協力や励ましの中で自己肯定感が高まる取組を行う。 ・授業等を活用し、生徒に生活習慣の改善や食育の推進の機会を設ける。 ・試験期間を利用し、スマートフォン等メディア個人使用ゼロ時間に取り組む。	・体力・運動能力調査にける、筋力・筋持久力の項目を全国平均値以上。 ・生徒アンケートにおける体育的活動の場面での協働的な活動に対する肯定的評価90%以上 ・スマートフォン、タブレット等の個人利用時間〔平日2時間以内〕生徒アンケートにおいて達成状況 40%以上	・筋力・筋持久力の項目について、令和6年度の全国平均値と比べると、多くの項目で全国平均値以上であったが、女子の上体起こしは-2.56ポイントであった。 ・生徒アンケートにおける体育的活動の場面での共同的な活動に関する肯定的評価は、91%であった。 ・スマートフォン、タブレット等の個人利用時間〔平日2時間以内〕生徒アンケートにおいて達成状況は23.4%であった。	3	2	・体育の補強運動で、上体起こしを継続的に実施し、基礎体力の向上を図る。 ・授業の中で、グループ活動など、他者に関わる場面を設定し、教え合いを通して生徒が主体的に学ぶ授業づくりを行う。 ・生活習慣チェックを使用したり、保健だよりを活用したりしながら、生徒自身がスマートフォンの使い方について考えていく取組を行う。	・体育の補強運動で、上体起こしを行うなど、基礎体力の向上に係る取組を実施することができた。 ・生徒アンケートにおける体育的活動の場面での協働的な活動に関する肯定的評価は94%であった。 ・期末期間中に保健だよりでメディアについて周知し、生徒自身がメディア使用時間を意識する取組を行うことができた。生徒アンケートにおいて、スマートフォン、タブレット等の個人利用時間〔平日2時間以内〕の達成状況は、28.4%であった。	3	3	3	・体力・運動能力調査において、上昇している種目もあるが、全国平均と大きく離れている種目がある。引き続き、基礎体力向上のため、体育の中で補強運動を行う。 ・他者との協力や励ましあいの中で、自己肯定感が高まる取組を行う。また、ランキングを掲示するなど、運動に意欲的に取り組める生徒を育む。 ・メディアについての意識づけをスタートすることができたため、小学校とも連携し、生徒自身がメディアをコントロールできる取組を行っていく。

1	・学校と地域が連携、協働し、子どもたちの成長を支える環境づくり		新規	・地域の多様な関係者の学校教育への参画を推進する。 ・地域の特色を生かした教育活動の充実を図る。	・CSを基盤とし、地域資源を活用した学習活動や行事等に取り組む。 ・小学校と連携した活動や地域行事への参加など、地域と関わる活動に積極的に取り組む。 ・保護者や地域にCSの活動を積極的に発信する。	・地域資源を活用した教育活動の実施（年間実施回数）3回以上 ・小学校との活動や地域行事への参加回数（年間実施回数）5回以上 ・保護者、地域への情報発信（年間実施回数）3回以上 ・地域の人から学んだり、教わったりしたことは、自分の将来に役立つと感じた（アンケートでの肯定的評価）90%以上	・9月末時点において、地域資源を活用した教育活動を9回、小学校との活動や地域行事への参加を5回行った。 ・地域の人から学んだり、教わったりしたことは、自分の将来に役立つと感じた生徒の割合は91.2 %であった。	3	3	・引き続き、地域資源を活用した教育活動や、小学校との活動、地域行事に参加しての活動を計画・実施する。 ・地域との関わりなどについて、ホームページや学年通信などで定期的に発信する。	・年間を通して、地域資源を活用した教育活動を28回、小学校との活動や地域行事への参加を20回行った。 ・地域資源を活用した教育活動等についてはその都度、学年通信等で情報発信を行ったが、中学校区・CSの取組としての情報発信は十分にできなかった。 ・地域の人から学んだり、教わったりしたことは、自分の将来に役立つと感じた生徒の割合は92.7 %であった。	3	3	3	・次年度に向け、今年度の各取組を振り返り、地域資源を生かした活動や小学校と連携した活動をより意識した教育課程の編成を行う。 ・各取組等の保護者・地域への情報発信について、方法等の検討を重ねながら重点的に取り組んでいく。
4	・教職員がやりがいを持ち、元気、笑顔で勤務できる環境の充実 ・教職員が個性を発揮しながら、生徒とともに自ら挑戦し続けることができる環境づくり		継続	・教職員どうしの対話、コミュニケーションを深める。 ・組織マネジメントを確立する。	・業績評価（自己申告）書で、教職員一人一人がやりがいの持てる目標を設定する。 ・チーム幸千として協働的で支え合える組織体制を構築する。 ・カリキュラムマネジメントを意識し、生徒の資質・能力を育み、教職員一人一人の持ち味を生かした持続可能な教育課程を編成する。	・教科の面白さを感じ、教科指導に意欲的に取り組んでいる教員（アンケートでの肯定的評価）90%以上 ・やりがいを感じている教員（アンケートでの肯定的評価）90%以上 ・授業づくりを行う時間が確保できている教員（アンケートでの肯定的評価）85%以上 ・個性が認められていると感じる教員（アンケートでの肯定的評価）90%以上	・「教科の面白さを実感している」教員の割合は100%であった。 ・「仕事にやりがいを感じている」教員の割合は93.3%であった。 ・「『子どもが自ら学ぶ』授業づくりにあてる時間がある」教員の割合は83.3%であった。 ・「本音を気兼ねなく発言でき、自分の個性が認められているという実感がある」教員の割合は93.3%であった。	3	4	・教職員が意欲を持って勤務できる環境を維持・継続するために、組織づくり、業務改善、持続可能な取組を、学校全体で考えながら、更に充実させていく。 ・教職員一人一人が子どもたちを高めるため、自分自身を高めるためにやりたいことや取り組んでみたいと考えることに対して、積極的に後押しできる体制を充実させるとともに、人的・物的環境の充実に努めていく。	・「教科の面白さを実感している」教員の割合は94.3%であった。 ・「仕事にやりがいを感じている」教員の割合は94.3%であった。 ・「『子どもが自ら学ぶ』授業づくりにあてる時間がある」教員の割合は74.3%であった。 ・「本音を気兼ねなく発言でき、自分の個性が認められているという実感がある」教員の割合は97.1%であった。	3	3	3	・日常の教職員の対話は質的向上を感じる。授業研究（教科指導）、学級経営、生徒指導、研究等について職員同士で対話する姿が昨年度以上によく見られた。しかし、多くの業務の中での多忙感がぬぐえず、時間的な余裕が無かったと感じる。今後は会議・行事はもとより学習活動の精選も考慮し推進していく。 ・教職員が積極的に挑戦できる環境づくりのため、日常のコミュニケーションを充実させ、お互いを尊重しながら教育活動に邁進する職員集団となることを目指す。そのために職員の実態把握・ニーズ把握のためのアンケートを定期的に実施する。

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。